



イングランド銀行。奥のビルにはロンドン貴金属市場協会が入居している。

歴史ある金の保管庫

古くから金は、通貨やその価値を裏付ける資産として用いられてきました。そうした役割を果たさなくなった現在も、金は資産として、国や中央銀行、民間投資家といったさまざまな主体によって保有されています。英国はまさに金本位制が始まった地であり、現在に至るまでロンドンには重要な金の取引市場であり続けています。

これまでに世界各地で採掘された金の総量は、オリンピックサイズのプール（長さ50メートル）の4杯程度とされています。イングランド銀行（英国中央銀行）には、約40万本の金塊が保蔵されており、その約2～3%を占めます。これは、ニュー

ヨーク連邦準備銀行に次いで世界で2番目の保有量です。もっとも、これらのうち、イングランド銀行が所有権を持つのはたった2本のみ。その2本はイングランド銀行博物館で見ることができ、実際に持ち上げることも可能です。

それでは残りの金塊は一体誰のものなのか。それは、英国政府と他国の中央銀行等が預託しているものです。イングランド銀行は、中央銀行向けに金を預かる業務を提供しています。預け入れられた金塊が市場で取引されて保有者が変わっても、現物を物理的に動かすことなく取引できます。これにより、安全に金塊を預託でき、いざという時には円滑な取引が可能というわけです。当然かもしれませんが、イングランド銀行の長い歴史の中で、金庫から金塊が盗まれたことはないそうです。

不換紙幣が用いられ、金が通貨の価値を裏付けるものでなくなった現在も、金は中央銀行の重要な資産の一部となっています。金は株式などのように配当を生み出すわけではないし、逆に現物を保有するには保管コストがかかります。それでも、2023年12月時点で、金の価格は史上最高値圏にあり、その需要は力強いものとなっています。こうした金をめぐる価値が、移り変わる経済情勢の中でどう変わっていくかということは興味深いものです。

（イングランド銀行、ロンドン）

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



イングランド銀行内にある博物館での金の展示風景。